

こうだろはん
幸田露伴

「一口劔」

何が心配になつて其様に浮かぬ顔せらるゝかと屢々女房に問はれて、是が苦勞のおもにと、ごろり、懷中より二十五兩づゝみ二つ投げ出せば、お蘭眼を丸くして急に手に取り上げ。如何な事、大金を粗忽にすると勿體なし、然し餘りに不思議で肝が潰るゝ、マア是はどうして持つて歸られし、と膝すりよすれば。聞て呉れ、今日庄屋殿と一所に御家老さまの御屋敷に上つたれば、小時待たせられて、足のしびれを忍ぶ内、やがて恐れ入った事には立派な御座敷へ侍に案内されて通り、直々に一つ間で御目にかゝつて御用を伺へば、御家老様とは仁體よき中年の御方、御聲やさしく、日本一の刀鍛冶正藏とは其方かとの御尋ね、吃驚して疊に頭を埋め、正藏とは全く私の名なれど果敢なき鍛冶、中々日本一など申すにはござなく、それはお人違ひなるべしと申したるに、コレあなたはなぜ其様に弱い事云はれし。イヤ、マア黙つて居よ。イヤイヤ辭退には及ばず、其方が業の當世に勝れて虎徹繁慶にもまさるべしといふ事まで告るものあつて残らず御上にも御存知なり、扱わざわざ呼び寄せしも餘の義にあらず、上の御意なれば確とうけたまはれ、と云はれて、惣身に汗かきながら愈々恐れ入つて伺へば、我が領内にそれほどの名工あるを知らず、むざむざと零落れさせしは残念なりし、急ぎ其者に命じて一ト振の新刀を作り出させよ。其れを功として取り立て得さすべしとの有り難き殿の御覺召なり、されども其方まづしくして、向ふ鎚にも仕事ある時だけあやしき近所の小僧を雇ひ居るといふことまで明白なれば、我に一切其方の都合よきやう取りはからひ得さすべしとの残る方なき仰せなり、其方が相鎚に欲しきものの名を指せば直ちに此方より人をつかはし、江戸よりなりとも京よりなりとも掛け合つて迎ひ取るべし、又色々の入費も

かゝるべければ、貧賤の其方迷惑ならむと即ち假りに五十兩下しおかるゝなり、尚日限百二十日を期して天晴れ業物を鍛ひ成すに於ては、十分の御褒美あるべき故、睨と覺悟いたし粗忽なきやう勵むべしとの御云ひ渡し。又庄屋に向はれては、正藏儀は大切の上の御用を勤むるもの故、其方十分に心付け便宜を與ふべし、事首尾よく成就せば其方には勿論御褒賞あるべしとの云ひ渡し。我は何とも云はぬ間に、あの庄屋めが一切我に代りて御受け申して歸つて来た夢みたやうな話し、と始終を語れば、お蘭が眼の周り、肩、口元、兩の頬、悦びの潮さして愛嬌の光り照りまさり、ひたひたと男に寄り近づき、くずれそうに無言で笑つて、堪へられずや、いきなり男の肩を突きこかし。是が何の苦勞、人を、人をぢらして嬉しい話を心配させながら聞かせて、こんなところで際どく女を騷る、ホ、性悪な眞似をなさる、と額越しに睨む眼の中色氣するどく、正藏花の香に酔へる鳥となつて後の聲を出しかぬる間に、女は金を神棚へあげて、勿論の事祝ひ酒買ひに戸外へ。

嬉しさを汲んで飲む喜び酒の廻り早く、少し亂れて膝の見ゆるも知らず前へずり出し、暗くなる燈火の心を簪でかきたて、ホ、愈々運の開くる時節か此丁字頭の大きさ、と云へど亭主は見やりもせず黙然たり。私は最早これほど酔うたに、どうしたものぞ其眞面目さは、心持でも悪いなら薬買つてまゐりませうか、それともたゞ草臥れてなら横になり玉へ、腰なと叩くべし、と傍近く来て日頃には似ずやさしくさるゝも却つて今宵はつらく思ふ正藏、冷めたくなりし猪口を取り、女の頸に左の手をかけながら、ぐつと飲み乾して。心配するな、どうもせず、といへば、お蘭は其まゝ男の膝に我が頭を横にして載せつゝ片手で酒をついでやり、ア、江戸を出てから初めて伸び伸びと氣が晴れて胸の痞へも下つたやうな、是れからはたゞ叔母様を、立派になつてから二人揃つて尋ねて驚かせ、むかしをわびて綺麗に許しを受け、又、おまへの親父様の勘當も許してもらひ、天下晴れての戀中と古い友達に羨ませ

て萬年も楽しく、ホ、殿様御臺みだいさまで中よくくらすばかり、あ、行末が見ゆるやうな、と眼を細くして、うとうととしかけ。ア、かうして居る間に眠うなる、わたしは今とるところと溶けて行くやうな好い心持、と甘ゆるもの云ひの情濃くなづまれて、肉躍るほど可愛きにつけ悲しみ深く、多、無惨、何として我が腹中の苦しさを告げて、まづい事を此しほらしい耳に入れらるべきや、と思はずホロリと落とす涙、頬にか、れば女房飛び起きて男にしがみつき、しげじげ顔打ちまもり。此方の人の隠しだては、恨めし、先刻よりの様子と云ひ、今の一雫ひとしずくは何處から出し熱いもので、心の底を何故女房には打明けられぬ、おまへのふところ

に此生命を投げ込んで居るわたしに餘所餘所よせよせしいはあまり酷し、云うて聞かされたとて善惡ともに後へ退かうやうな未練な惚れやうはせぬ女とはまだ思つて居られざりしかと纖小きよせな身體を打ちまかせて口説き立つるに、亭主ますます堪へられず力任せに抱きしめて聲曇らせ。お蘭お蘭、ゆるして呉れ、悪い事は皆我に在り、云ひ出しかねては居たれどももう云はでは叶はぬ仕義、一ト通り聞いて我をそなたの思ふ存分にせよ。實は今日殿様よりの御言葉をつけて我が命は最早斷えたり。仔細は語るさへ耻かしきなれど、十日ばかり以前の夜、そなたに向つて我が云ひし事のどうしてか残らず殿様の耳に入りしと見え、我を天晴れの鍛冶と思ひ込まれての御恩命、あり難いは山々なれど悲しいには此腕が鈍くて、中々師匠を凌ぐほどの銘作の出来よう筈はずなく、御辭退申さうと思つても過ぎし夜の大言を知つて居らるれば云ひ譯わけけの無きに苦しみ居し内、庄屋めが御請けして仕舞つたれば其れを云ひ崩すだけの智慧は尚々出でず、ぐずぐずと大金まで頂戴して來たものゝ歸る道すがらも夢路を辿つて、草も木も眼には見えず、所詮良きものを作り出さねば大金迄戴きて置きて御上をいつはる罪重きお咎とがめに逢ふは必定、又我が腕前うでまえを有り體ていに申し上ぐるとも御上に虚言せしやう取りなされるれば是も御咎めを受くるは知れし事、腕さへおぼえあらば嬉しよこんで随分と念を入れ鍛ひ成すべけれど、コレどうか許して呉れ、まことは先の夜そなたに云ひしは、悪い氣でせしにはあらねど、そなたの心をやすめようばかりに不圖ふと出氣心でつい口走りし譯、元來は我鍛冶の道には十年の餘もたづさはつて精を惜まず勵み習ひ、法はあらかた知りたれど、性得不束しやうとくふじやくにてとても天下に名ある鍛冶たちの中に出づべき程には至らず、よしや一念を籠めて作ると

も人の眼はあざむき難き鏡、忽ち見あらはされて尚さら重き罰を受くべしと思へば、如何にとも仕方なし、此上は頂戴せし金を封のまゝ残し置き、云ひ譚の書き置きをして、出奔するより外はなし、御慈仁深き殿様に對しても、御家老様に對しても、庄屋殿に對しても、そなたに對しても、合はすべきかおもなく出すべき言葉も知らず、自分ながら腑甲斐なき身を口惜くは思へど、正直のところは此始末、定めし愛想もこそも盡きたるなるべし、されどそなたに見はなされたりとも、それを恨める身ではなしと、つくづく我が愚を悟りたれば、我をすてて働きのある男をば見たて、行末長く榮えて呉れるがまだしも望みなり、さもあれば我は此世をやめて、山寺の坊主とも雲水の修行者ともなるべし、くれぐれもそなたに好い加減の事を云ひし罪は此苦しみにめんどじてゆるして呉れよ、と涙ながらに長々しく語り終れば、お蘭は赤くなり青くなり聞き居しが此時常にかへりて。なんの、水臭い、別れ話はやめて下され、誰が男を坊主にさせてよいものか、聞けば皆殿様が餘計なお世話、此處ばかりも日は照らず、手を引き合つて逃るに雑作はなし、なんのなんの、女房に亭主が云ひ譚には及ばず、ホ、氣を大きくして最少しお飲みなされ、あとの話は酒にあたまつて寝てからと、膽の太い女かな、立ち上がつて戸締りをして來て座について、又一盃仰ぎ。ゑゑお星様の落ちたを見て薄ら寒くなった、チョツ、何が何様したつて、何様なるものぞ、ホ、惚れたが弱身で負けて遣る。